一銭五厘であつても五厘の値上をしても資本家は尚且つ（他の工場に比較して）五厘以上安いのだ。従つて資本家側が易々として承認したのも決して不思議でない。

☆ ☆ ☆

しかしながら資本家と云ふ奴は余程の脅威を感じないとビタ一文だつて自己の利益に反するやうな要求は断じて承認しない。だから要求の高い低いによつて勝敗が決するのではない。この点は是非争議の時にしばしば述べたやうに勝敗の如何は資本家の強大な弱点を突くための準備斗争の如何にあるのだ。浅井製材の場合は資本家が争議の準備をもつてゐなかつたことと、現評議会が争議団指導に積極的にのりだしたことによつて僅か二日にしろ獲得で来たのだ。しかし浅井の勝利の条件を一般的にあてはめることは間違ひだ。何故ならばすぐれあたらしの勝利だつたからである。

もう一歩押進めて考へて見ると資本家の弱点を決定的に突くやうな準備斗争が完全に用意されてゐたら目前の休みの手当を獲得することも出来たであらうし、また組むにも工賃以外の工場なみに一銭五厘は値上することも出来たであらう。

準備斗争こそ勝利の絶対条件である。

☆ ☆ ☆

国家社会党のダラ幹共の指導権をどうして我々の手へ奪取したか——これを述べるまへに製箱工の統一運動情勢を述べて見やう。

昨年の春から石京合会の諸君によつて製箱工の単価統一（運動が押進められてゐたのである。浅井製材は製箱工場の中の親工株でこいつを射落すことができればほかの製箱工場の大部はワケなく獲得できると云つた我々にとつては実に貴重な目標工場だつたのだ。

ところがやつかいなことにはこいつが一番なんぶつでなかなか手をやいてゐたのだが偶然にも二月十六日国社党の市会議員長瀬君の指導で争議に這入つた。争議決行後六日にこれを知つた石京の諸君は直ちに当日我々と共に争議団本部へ押かけた。時あたかも長瀬君は単独交渉を終へて争議団で次の如き解決条件をむりやりに押付け「よく考へて置け」と云ふて彼は自宅に引上げて行つたあとだつた。四十人の職工はボウゼンとして居た。次が長瀬君の解決案だ

○この中から犠牲になる志望者五、六人を出して解決せよ！

これではボーゼンとするのも無理はない。労働条件の改善位の要求をこんなベラボウな要求とスリ替えてしまつたダラ幹の遣り方に争議団は非常に憤慨していて抗議をせんとした時、石京合会の諸君は「いまぞ」とばかりにアジリ、尚且ストライキの戦略戦術を親切に教へた。大衆は遂に長瀬君ボイコツトを決意して指導を全部中評に求めて来た。それから後二日後要求の全部を獲得大勝利に解決したのである。